〖研究ノート〗

サマルカンドの通称ビービー・ハヌム・マスジドの定礎碑文について

井谷鋼造

はじめに

サマルカンドは，中央アジアの中心部を占める，現在のウズベキスタン共和国において，約300 km西方に位置する**ブハーラー**とともに，この国を代表する歴史都市であり，毎年多数の観光客が訪れる町でもある。ウズベキスタンの首都タシケントからは，南西方向へ約300 kmの距離にあり，航空機を使えば，1時間足らずで到着する。現在の市街の一角，本稿で扱う，通称ビービー・ハヌム・マスジドの東北方向の間近には「アフラースィヤーブの丘」と呼ばれる，茫漠たる廃墟が広がっており，この廃墟は西暦13世紀にモンゴルの中央アジア遠征によって破壊された，かつてのサマルカンドの都城址であるとされている。ここでは，ブハーラーと並ぶ古い歴史をもつ都市である，サマルカンドを含む中央アジアの歴史を，ティームールの出現まで，簡単に紹介しておく。

紀元前6世紀半ばに成立した，アカイメネス（ハカーマニシュ）朝の時代から，西暦8世紀の初めに，アラブ人ムスリムの軍隊が本格的に中央アジアに進出するまで，サマルカンドやブハーラーを含むザラフシャーン河の流域は，**ソグド（スグダ）地方**と呼ばれ，インド・ヨーロッパ系でイラン語の一分枝であるソグド語を用いる人々が多く居住していた。ソグド人は，3世紀ころから中央アジアを拠点に，国際的な通商活動を展開し，東方の中国では，**胡人**と呼ばれた。胡人の風俗や文化は，いわゆる「シルク・ロード」を通じて日本にも伝えられ，正倉院御物の中にはソグド文化の影響を受けた遺品も残されている。8世紀初めのアラブ人ムスリムの中央アジア（アラビア語では，

“河の向こうの土地” を意味する「**マーワラーアンナフル**」という名称で呼ばれる。この場合の河は，中央アジアを東方から西方へと貫流する，アム河のこと）進出によって，ソグド人の小都市国家群が中央アジアから一掃されたあと，中央アジアでは土着化したアラブ人による支配が始まり，ゾロアスター教をはじめとする，土着の宗教（一部では，キリスト教，仏教）を駆逐して，イスラームも広まっていった。9世紀の後半になると，ブハーラーを首都として**サーマーン朝**が成立し，イスラーム以前のサーサーン朝の王統に連なることを自称した，この王朝の宮廷では，アラビア文字を用いた近世ペルシア語（**ファールスィー**）による文化伝統が打ち立てられた。サーマーン朝の支配時代に，北方の草原地帯からトゥルク系の諸民族出身の奴隷（アラビア語でマムルークと呼ばれた）がイスラーム世界の各地に移入され始めた。また，奴隷身分ではなく，自発的にイスラームに改宗して中央アジアに進出するトゥルク系の人々も現れ始め，**カラハン朝**は現在のカザフスタン，キルギズ（クルクズ），ウズベキスタン，中国領にまたがる地域に成立した，最初のムスリム＝トゥルク系の政権である。カラハン朝は999年にブハーラーを陥落させて，サーマーン朝を実質的に滅ぼし，中央アジアの中心部に政権の中枢を移した。その後中央アジアには，セルジュク朝，ホラズムシャーフ朝などのいずれもトゥルク系の支配者一族を戴く勢力が勃興した。カラハン朝の時代から中央アジアでは，遊牧民族出身である，トゥルク系の軍人たちと，古くからソグド各地に定着して農耕生活，あるいは通商交易を営んできた，イラン＝タージーク系の人々が官僚などとして国家の運営を分担する体制がしだいに出来上がっていった。

1218年に始まる，北アジアの遊牧民族モンゴル人の支配者**チンギズ・ハン**による中央アジア遠征は，ホラズムシャーフ朝を滅亡させ，それまでに成立していた，トゥルク・イスラーム的な支配体制をいっきに瓦解させた。これから約1世紀半にわたる期間は，モンゴル人の建てた，チンギズ・ハンの次子，チャガタイを祖とする，チャガタイ・ウルスが中央アジアの中心部を掌握していたが，強力で安定した政権は生まれず，全体として政治的には混乱が絶えなかった。こうした中央アジアの混乱を実力で平定し，中央アジアに新たな政治的な安定と経済的な繁栄をもたらした人物が**ティームール**（1336－1405）である。ティームール（トゥルク語では「テミュル」といい，“鉄”

の意）はチャガタイ・ウルスの支配下にあった，現在のウズベキスタンのシャフリ・サブズ（当時はキシュという名でも呼ばれていた。サマルカンドの南方にある）近郊に生まれ，民族的・文化的にトゥルク・イスラーム文化の影響を強く受けた，モンゴル系軍人の末裔であるが，1370年にサマルカンドを征服して，中央アジアの中心部に政権を確立した。ティームールとその子孫たちの時代にサマルカンドはティームール朝の首都として発展し，現在に残る壮麗な歴史遺跡のうち，ティームールとその一族の墓廟である，**グーリ・アミール廟**，レギスターン広場の**ウルグ・ベグ・マドラサ**，**ウルグ・ベグの天文台跡**（復元），通称ビービー・ハヌムの名で知られる，**サマルカンドのマスジド・ジャーミウ**，アフラースィヤーブの丘の一角を占める**シャーヒ・ズィンダ墓廟群**などの遺跡は，ティームール朝時代に遡るものであり，観光地としても有名である。

1．通称ビービー・ハヌム・マスジドの定礎碑文について

2002年8月～9月に筆者は5年ぶりにウズベキスタンを訪れる機会を得た。今回のウズベキスタン調査で，筆者は主としてカラハン朝を中心とする時代の墓碑銘や遺物に残された銘文を研究する課題を負っていた。そして約3週間の滞在中，ウズベキスタンの各地，具体的には，タシケント，サマルカンド，ブハーラー，ファルガーナ地方のいくつかの町（コーカンド，ファルガーナ，クヴァー，リーシュタンなど）の博物館などでいくつかの墓碑銘や金属器の銘文を調査した。それらの中で，今回筆者が最も関心を惹かれた碑文は，サマルカンド市内の**通称ビービー・ハヌム・マスジド**（写真1）の礼拝堂本体の前面入り口に掲げられた，次のようなアラビア語の碑文（写真2）である。原文で示せば，次のようになる。

امر ببناء هذا الجامع المبارك العالي قطب الدنيا والدين امير تيمور كوركان بن الامير ترغاى

ابن بركل ابن ايجل بن ايلانكير ابن الامير قرجار نويان خلد الله تعالى سلطانه في تاريخ سنة احدى وثمانمائة

日本語に訳すと，

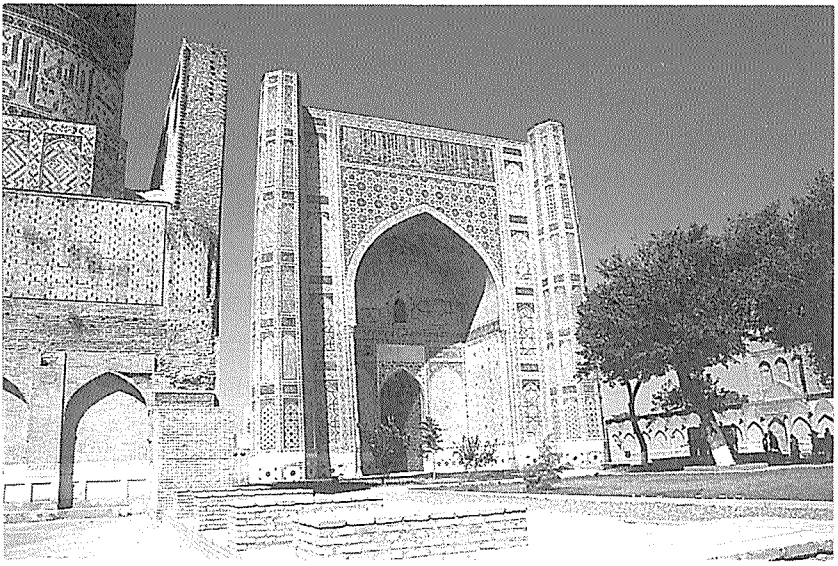

写真 1

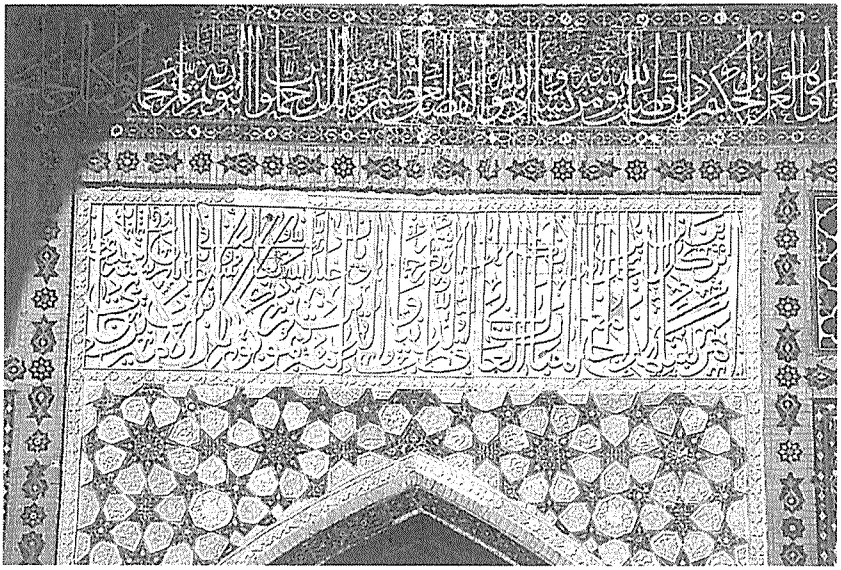

写真 2

アミール・カラチャール・ノヤンの子，イーラーンギールの子，イージェルの子，ブョルギュルの子，アミール・タラガーイの子，クトブッドゥンヤー・ワッディーン・アミール・ティームール・クーラカーン（キュレゲン）——至高なる神が彼の権力を永遠ならしめるように——が，801年に，この祝福された，いと高きジャーミウの建設を命じた。

というものである。（下線部＿＿はティームールに至る系譜，下線部〰〰はティームールの名前，下線部‐‐‐は讃辞，以下の碑文の翻訳でも同じ。）この種の定礎碑文は，たとえば，筆者が最近の5年間ほど，毎年1回は現地を訪れて碑文の調査をしている，西アジアのトルコ共和国などで，西暦13世紀以来，各地のジャーミウ（礼拝堂），マドラサ（学校）その他の公共建築物（橋梁やハンマームと呼ばれる公衆浴場，キャラヴァンサライ）や墓廟などに，多数が残されており，決して珍しいのもではないが，中央アジアでは初めて目にしたものであった。碑文について，予め情報を持っていなかったため，通称ビービー・ハヌムの巨大な礼拝堂の前に立って，この碑文を目にしたとき，筆者は，正直，非常に驚き，またとても興奮した。通称ビービー・ハヌムの礼拝堂は，近づくと，頭上はるかに見上げるほどにそそり立つ，巨大な建築物（あまりに巨大なために創建以来，地震などの影響でしばしば一部が崩落した。1974年以来，全面的に修復工事が進められている）であるが，上記の碑文も巨大で，文字も明瞭である。写真を見れば明らかなように，上に掲げた碑文の，アラビア語原文の1行目は特に大きな文字で，下方に刻まれ（浮彫），2行目はそれよりも小さな文字で，1行目の上方に位置している。この碑文が創建当時から存在していたものであるのかどうかについて，筆者は，国立サマルカンド歴史・建築・芸術博物館の**ヌウマーン・マフムードフ館長**に尋ねてみたが，その答えは，オリジナルではなく，後世に作られたもの（複製？）ということであった。また，9月6日にタシケントのウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所の所員たちとの学術交流会がもたれた際にも，この碑文のことを話題にしたが，ウズベキスタンを代表する文献学者である，**アサーム・ウルンバーエフ博士**からは，同時代史料の記述を利用した，後世のもの（複製？）ではないか，という意見が出された。マフムードフ，ウルンバーエフ両氏の意見は，現地で長年にわたって歴史研究に携わってきた専門家の見

解として，尊重されるべき，貴重で重要なものである。にもかかわらず，今のところ筆者は，通称ビービー・ハヌム・マスジドの碑文が後世に作られたもの（複製？）であるとの決定的な情報を得たり，その証拠を発見したわけではない。また，仮に碑文が後世に作られたもの（複製？）だとして，いつごろ，誰が，どのような目的でこの碑文を作ったのか，ということが明らかにされなければならない。これまでの，筆者のトルコ共和国内での碑文調査の経験では，建物が後世に再建された場合は，その再建工事を命じたり，その費用を負担した，支配者などの名前が，別に再建碑文として残されている場合が少なくないように思われる。残念ながら，今回の調査では，そのような再建碑文の存在には，気付かず，情報も得られなかった。1974年からの修復工事開始以前の写真（日本で出版されたものとして，筆者の手許には，『シルクロード〈I〉中国・ソ連・アフガニスタン』山と渓谷社，昭和48年，29頁，『文藝春秋デラックス　昭和50年8月号　トルコから正倉院へ「シルクロードの旅」』巻頭頁などがある。）でも碑文は，中央部に欠落があるものの，はっきりと撮影されており，大規模な修復工事は，20世紀の後半以前には実施されなかったようである。

2．史料から見た，通称ビービー・ハヌム・マスジド創建の事情

ここでは，現在ビービー・ハヌム・マスジドと通称されている，サマルカンドのマスジド・ジャーミウ（アラビア語で，“ムスリムにとって最も重要な，金曜日の正午過ぎの集団礼拝が行われる，各都市で最も重要な礼拝所”という意味である）が，いつ，どのような状況で創建されたのか，をティームール朝時代の歴史資料から明らかにしたい。

ティームール朝時代の，特にティームール個人の歴史について，詳しい記録を残しているのは，**ニザームッディーン・シャーミー**及び，**シャラフッディーン・アリー・ヤズディー**の同一名の歴史書，**『勝利の書』**ظفر نامه である。特にシャーミーの『勝利の書』は，1404年，ティームールの在世中に献呈された歴史書であり，史料としての価値が高い。また，ヤズディー（1454年没）の『勝利の書』はテヘラーンで校訂テクストが出版されているほかに，1972年には，ウズベキスタンのA. ウルンバーエフ博士によって，タシケン

トのウズベキスタン科学アカデミー東洋学研究所所蔵の写本（登録番号は，No. 4472，もとコーカンドのホダーヤール・ハーン（在位 1845－66）の所蔵本。写本全体の筆写年は不明だが，作品に含まれる مقدمة の筆写は，1038 年ラマダーン月 21 日月曜日（1629. 5. 14.）である。83 b）がファクスィミリ版の形で，出版されている。以下では，このふたつの「ティームール遠征記録」のヒジュラ暦 801 年の条にある，サマルカンドのマスジド・ジャーミウ建設の記事を翻訳し，マスジド建設の事情を検討してみたい。まず，翻訳に先立って，サマルカンドでのマスジド・ジャーミウ建設の記事が『勝利の書』のどの部分に置かれているかを説明しておく。ティームールは，1370 年のサマルカンド征服以来，まさに絶倫としか形容できない，驚異的な精力で，中央アジアとその周辺地域に対する征服活動を続けたが，ヤズディーの『勝利の書』（محمد عباسی 校訂本，第 2 巻，Tehran, 1336. s. 21）によると，ヒジュラ暦 800 年ラジャブ月（1398. 3. 20.－4. 18.）には，**ヒンドゥースターン遠征**に出発し，弱体化していたトゥグルク朝の首都である，デリーをはじめとする各地を征服後，ガング（ガンジス）河の流域にまで至った。その後ティームールはヒンドゥースターンを離れ，中央アジアへと帰還し，801 年シャアバーン月 1 日（1399. 4. 8.）には生地であるキシュに到着し，15 日間滞在後，キシュから峠道を越えて，22 日（4. 29.）にサマルカンドに到着している。（Felix Tauer 校訂本，Praha, 1937. pp. 210－11）以下の翻訳の部分は，それに続く記事である。ちなみに，ティームールは，サマルカンドでマスジド・ジャーミウ建設を命じ，それを自ら監督した後，ヤズディーの『勝利の書』（op. cit., s. 153）によれば，秋の始まりである，802 年ムハッラム月 8 日（1399. 9. 10.）には，「**7 年戦役**」で知られる，アーザルバイジャーン，イラーク，シリア，アナトリア遠征の途に着くので，この時のサマルカンド滞在も僅かに 4 ヶ月余りの短いものであった。以下は，**シャーミーの『勝利の書』の関連部分**の翻訳である。（（　）内は，筆者による訳注，補足や原文表示である。以下の引用でも同じ。）

＊（サーヒブ・キラーン）陛下が国都サマルカンドに建設されたマスジド・ジャーミウについて

至高にして，栄光ある創造主は，主のことばにして天の命令書である，栄えあるクルアーンの中でこのようにおっしゃっている。【アラビア語原文】

「しかるに，神のマスジドをいくつも建てる者は，神と最後の（審判の）日を信じた者」（『クルアーン』第9章18節の冒頭部分）つまり，神と最後の審判の日を信じる者でなければ，マスジドをいくつも建てたりすることはない，ということである。存在物の主（ سيد كاينات 預言者ムハンマドのこと）―― 神が彼を祝福し，平安ならしめるように ―― は次のようにおっしゃっている。【アラビア語原文】「神のためにマスジドを建てた者は，たとえそれが，砂鶏が抱卵のために掘った穴のごときものであっても，神は彼のために，楽園に一つの家を建てるであろう。」つまり，神のためにマスジドを建立する者は，たとえそのマスジドが砂鶏（ قطاة ）といわれる鳥の巣程度であっても，偉大なお方（神）は，彼のために楽園に一つの家を建てるであろう，ということである。アミール・サーヒブ・キラーン（諸史料中で用いられる，ティームールの別名・尊称であり，「星の合の主」の意味をもつ。）陛下は不信心者や堕落した者たちの根絶を終え，悪徳の徒に対するジハードを片付け，王者の鐙をその地方（ヒンドゥースターン）からサマルカンドの方へと向かわせると，

詩

ヒンドゥースターンから国都へと向かった。
めでたい星，勝利の日，幸運の前兆と共に。

国都であるサマルカンドにマスジド・ジャーミウを建設し，その善行（ حسنه ）によって，栄光の主である，お方（神）に近寄って，その恩寵を求めることを発起（ نيت ）した。最良の場所を選び，ラマダーンの祝福された月の4日（1399. 5. 10.）熟練した親方たちや技能を持つ建築家たちに命じ，その結果，その祝福された建設の図面が引かれ，最も祝福された時間に，基礎が置かれ，その柱や基盤は石で立ち上げられた。最高の陛下（ティームール）は，この上ない関心の極みからご自身で建築の現場に立ち会われ，その完成に心血を注がれていた。その高層のバルコニーは，建設者の運命が上昇する場のように，頂を天に向かってもたげ，その近寄りがたい門は，彼の命令の栄光の通路のように，足を天の頂に踏みしめていた。その空間は，楽園の広さを語り，芳香をふりまくその空気は，絶佳の麝香の香りを広めることを伝えた。堅固さにおいてイスカンダルの防壁のごとく，偉大さにおいてふたつのピラミッドのドーム（ قبه ）のごとき，そのミンバルとミフラーブは，精巧な技術で飾られ，そのアーチや通路（ طاق و رواق ）は，ヌーシーン・ルヴァーン・キス

ラー（サーサーン朝の王，ホスロウ1世）のアーチを凌いだ。（＊）タスビーフを唱える者たちの大音響は王国の内部にこだまし，唯一の神を讃える者たちの大音声は天空に鳴り響いた。

（詩）

おお，何と高い建物であろうか。天国のバルコニーも
お前の高さに劣ることを告白したほどの。

至高なる神が，この神の影である，アミール・サーヒブ・キラーンを，善行を広め，慈善をあふれさせることにおいて，長年永続させられますように。（Felix Tauer 校訂本，Praha, 1937. ss. 211-2.（＊）のある下線部は，原文では，このような意味にならないが，意訳した。）

ヤズディーの『勝利の書』の記事は，シャーミーの記事よりもかなり分量が多い。文章に施された修飾辞や形容詞も華美で，著者の，宮廷史家としての，美文作成能力を見せつけるような文体で書かれているが，上記のように，こちらの方は，容易にタシケント写本を参照できることから，歴史研究の面で，シャーミーとは違った，また別の重要な意味がある。以下は，**ヤズディーの『勝利の書』の関連部分**の翻訳である。

＊サーヒブ・キラーン陛下が国都サマルカンドに創建された，マスジド・ジャーミウの建設について

【原文アラビア語】「しかるに，神のマスジドをいくつも建てる者は，神と最後の（審判の）日を信じた者」（『クルアーン』第9章18節の冒頭部分）という尊い一節の述べるところ，つまり，マスジドの建設は，最大の創造者（神）の本質と属性を真摯に信じることと，（死者の）復活と最後の審判の日の状況を信じることの結果であるということ，が理解されたので，（神に）護られ，公正を広めるサーヒブ・キラーン陛下は，多神教と暴虐の建造物を破壊し，不信仰者の拝火殿や偶像の家を荒廃させることに従事した，ヒンドゥースターン遠征（يورش）において次のことを発起した。【原文アラビア語】「信者の発起は，その行為に勝る。」サマルカンドに金曜日（に集団礼拝を行なう）マスジドを作り，そのバルコニーを天頂に掲げようと。世界を征服する一行が，勝利を与え，道を示す，神の後援と守護の翼の下で，国都サマルカンド

に帰還すると，天を摩するその建物の建設について，いと高き命令が発せられた。そして【原文アラビア語】「建設には日曜日」という指令に従って，月が獅子座にあり，太陽の六分割（تسديس）を離れ，金星の六分割に接していた，兎の歳（توشقان نيل 13世紀のモンゴル支配時代以来，イラン，中央アジアで使用された，中国起源の十二支獣暦）に当たる，801年の祝福されたラマダーン月4日（テヘラーン刊本では，14日となっているが，ウルンバーエフ博士が刊行した，タシケント写本では，4日である。346 b）の日曜日に，技能を持つ建築家や知識があり，熟練した，親方たちが，星がふさわしい位置にある，めでたい時間にその基礎を設計した。各人が各国で，無比の第一人者である，腕の立つ職人や技術者たちが，その基礎を固め，柱石を強化することに，熟達の妙技を発揮した。アーザルバイジャーン，ファールス，ヒンドゥースターンやその他の国々の石工たちのうち，500人（テヘラーン刊本では，200人となっている。）が，マスジドの本体で工事に当たった。別の500人が，山中で石切と町への搬出に苦労した。全世界から国都へ集められて来ていた，技術者や芸術家の集団は，各人がそれぞれの持ち場で最大限の努力を払った。機材を集めるために，ヒンドの国からサマルカンドへ来ていた，95頭の，山のように巨大な象がすべて動員された。巨大な石は，牛の引く荷車で多くの人々が引っぱっていた。仕事は，王子たちやアミールたちに割り当てられ，人間の能力が及ぶ，努力について，いかなることについても，寸分の注意すら怠らなかった。こうした状況の間に，命令により，この間ジェテとの境界（モグーリスターン方面）に駐屯していた，王子，ムハンマド・スルターンが何人かの側近を連れて到着し，トゥーマーン・アーガー（ティームールの妻の一人。間野英二「ティムールのオルド」『バーブルとその時代』松香堂，2001年，350頁参照）のハーンカーフで，敷物に接吻する栄誉に浴し，贈り物を奉献する習慣を実行した。サーヒブ・キラーン陛下は王子を抱擁し，慰撫した。その陛下は，その宗教的な仕事を成し遂げることに熱心なあまり，御自ら建設の現場に立ち会われ，それどころか，その間ほとんどの時間を，マスジドの近傍にある，ハーニーム（テヘラーン刊本では，「ハーニム」となっている。）のマドラサやトゥーマーン・アーガーのハーンカーフですごされた。公正を広め，臣民を養うことに関わる，王権や宗教の諸案件をそこで裁決されていた。王者たる関心の吉兆により，そのいと高きバルコニーは，建設者の運命の上昇す

る場所のように，土星のイーヴァーンに並び立ち，くつろぎのある，その中庭の清澄さと，生気を与える，その空気の芳香は，楽園や天国の描写を忘れさせるほどであった。

詩

おお，何と高い建物であろうか，天国のバルコニーも
お前の高さに劣ることを告白したほどの。

一つ一つが7ガズ（長さの単位，約1m）の長さの切石からできた，480本の柱が立ち上げられた。その高い屋根や珍しい床は，削られた石板で仕上げられていた。床から覆いまでのその高さは，約10ガズ（テヘラーン刊本では，9ガズとなっている。）である。

韻文（タシケント写本では，「キトア」つまり，詩片となっている。）

もし，お前がそのマクスーラのドームやアーチにしるしを付けようと求めても
銀河や天空以外には何物をも言うことはできない。
ドームは単独でも，天輪がそれに次ぐことはなく，
アーチは唯一でも，銀河がそれに並ぶことはない。

その四隅の各々には，マナール（光塔，いわゆるミナレットのこと）が天に向かってそびえ，【原文アラビア語】「われらの足跡はわれらを導く」という声が，世界の四隅に届く。ハフト・ジューシュ（直訳は「七つの沸騰」，ここでは，鉄，銅，鉛，錫，金，銀，アンチモン7種の金属の合金）でできた，その大門のきしる音は，七つのイクリームの僕たちをイスラームの平安の家へと招く。内外ともに，壁の周囲やアーチの周りは切石の碑文で飾られ，洞窟（ كهف ）の章（第18章）やその他のクルアーンの章句のことばや文字の光が，その上で輝く。そのミンバルやキブラを示す場所の完全な美しさは，【原文アラビア語】「われらはお前を，お前の満足するキブラへ，顔を向けさせる」（『クルアーン』第2章144節の一部）という聖句を，【原文アラビア語】「お前がどこに顔を向けようが，そこには神の顔」（『クルアーン』第2章114節の一部）の秘密を知る者たちの，洞察力ある視線に誇示する。

半句（ مصرع ）（この単語は，タシケント写本には見えない。）

それを見る，（神の）恩寵の眼がある限り

その鉄でできたミフラーブは，【原文アラビア語】「夜明けに彼らは，（神

の）許しを乞う」（『クルアーン』第51章18節）者たちの呻きや嘆息よりも明らかな鏡であり，【原文アラビア語】「彼らは，われらが彼らの最良の行為を受け入れ，その過ちを見逃す者たち」（『クルアーン』第46章16節前半）の状況がそこに映し出される。たとえ，鏡が嘆息により，暗くなるとしても。現在，【原文アラビア語】「彼らは，サラートを厳守する者たち」（『クルアーン』第70章34節，冒頭 ّ を除く全文）という恩寵を得た者たちの遊楽地である，その王者たる場所では，早暁より，（夜の）休息に至るまで，途切れることなく，義務的な勤めや規定以上のサラートが実行され，善行のうち，あらゆる敬虔な行いやイバーダートが行なわれている。（下線部を付けた文章は，テヘラーン刊本には欠如している。）タスビーフを唱える者たちの大音響は，王国に集う，ズィクルを行なう者たちの輪にこだまし，唯一の神を讃える者たちの声は，【原文アラビア語】「神が命じたことに背かず，命じられたことを行なう」（『クルアーン』第66章6節末尾）僕たちの庵に下る。かの，宗教を育む帝王であるサーヒブ・キラーンの固い願望は，【原文アラビア語】「神のためにマスジドを建てた者は，たとえそれが，砂鶏が抱卵のために掘った穴のごときものであっても，神は彼のために，楽園に一つの家を建てるであろう。」の言うとおり，そのバルコニーの一つ毎に，永遠の楽園では城が一つ供され，天国の煉瓦一つ，巨石の一つ毎に，【原文アラビア語】「その広さが，まるで天地の広さのような楽園」（『クルアーン』第57章21節の一部）が日々の糧となり，創造主であるお方との，無比の出会いの場である，麝香の砂丘において，ミンバルの上の，眼中の光は，永遠の喜悦を享受することであった。（以下は，断食月であるラマダーン終了後の祝宴の準備と模様を描写した，マスジド・ジャーミウ建設とは無関係の記述が続くので，省略する。テヘラーン刊本第2巻 s. 144－6，ウルンバーエフ刊行タシケント写本346 b－347 b をもとに翻訳した。）

これらふたつの『勝利の書』の記述から，アミール・サーヒブ・キラーンこと，ティームールがヒンドゥースターン遠征から帰還後，ヒジュラ暦801年ラマダーン月4日（1399. 5. 10.）に，自らの広大な領土の首都である，サマルカンド市内に，切石をふんだんに用いた，前例のない規模の，壮大なマスジド・ジャーミウを起工し，自ら工事の現場に立ち会って，その工事を熱心に督励したことが明らかとなる。シャーミー，ヤズディーふたつの『勝利の

書』の関連部分の冒頭に引用される，**イスラームの聖典『クルアーン』の一節（第9章18節）**は，これもともに両者が引用する，イスラームの預言者ムハンマドの言行を記録した，「砂鶏が抱卵のために掘った穴」を譬えとする，ハディースの一節とともに，西アジアのトルコ共和国のマスジドなどでも，よく碑文などの形で掲げられているが，この節をすべて挙げると，

（アラビア語原文）

انما يعمر مساجد الله من آمن بالله واليوم الآخر واقام الصلوة وآتى الزكوة ولم يخش الا الله فعسى اولئك ان يكونوا من المهتدين

（日本語訳）

しかるに，神のマスジドをいくつも建てる者は，神と最後の（審判の）日を信じ，礼拝を行ない，喜捨を出し，神以外の何ものをも怖れなかった者である。彼らは，必ずや，神によって正しく導かれた者となるであろう。

である。ふたつの『勝利の書』によると，ティームールはこの『クルアーン』の文言に従って，サマルカンドに壮大なマスジド・ジャーミウを建設したことになり，特にヤズディーの記述によれば，宗教的にも並々ならぬ熱意を持って工事に臨んでいたようである。この文言にいう「神のマスジドをいくつも建てる者」とは，要するに，イスラームの教えを誠実に信仰し，真摯に実践する理想のムスリムということであり，権勢並ぶ者なき地位にあった，稀代の大征服者ティームールもまた，自らの真摯なムスリム君主としての名声を後世に伝えるべく，首都サマルカンドのマスジド・ジャーミウ建設に取りかかったのであろう。シャーミーが記した「マスジド・ジャーミウを建設し，その善行によって，栄光の主である，お方（神）に近寄ってその恩寵を求めることを発起した」とは，まさにティームールがマスジド建設に，自らの名声を永劫ならしめ，また，一人のムスリムとして，来たるべき最後の審判の日，マスジド・ジャーミウ建設という善行・壮挙によって，犯した罪を免ぜられ，さらには神の大きな賞賛に与かるという，意図を込めていたことを明示している。このような，ティームールによる，サマルカンドのマスジド・ジャーミウ創建の状況を考慮すると，上記のような定礎碑文を，後世の，ティームール本人以外の人物が，残させたことは考えられない。また，定礎碑文に見られるティームールへの讃辞「至高なる神が彼の権力を永遠ならし

めるように」という文言が，ティームール自身が在世中でなければ，後世の権力者に，たとえそれが彼の子孫たちのうちの一人に対してであろうとも，用いられることは不可解である。つまり，本稿で紹介した，通称ビービー・ハヌム・マスジドの定礎碑文は，かりにそれが後世に作られた複製であるとしても，その内容が，正しく創建当初の時期に由来することは，疑問の余地がないと思われる。

ヤズディーの『勝利の書』によれば，「7年戦役」を終えたティームールは，807年ムハッラム月（1404.7.10.-8.8.）にサマルカンドに帰還した。その直後の記事に，自らの不在中工事が進められていた，マスジド・ジャーミウについての記述がある。それは，以下のようなものである。

その陛下が創建されたもののひとつである，マスジド・ジャーミウを通過した時，その陛下が不在中に立ち上げられた，その門が陛下の御眼には短小であるように見えた。それを取り壊し，より高く，広壮な門が築かれ，掲げられるように，いと高き命令が発せられた。フワージャ・マフムード・ダーヴドは，その門を広げ，高めることにおいて犯した，失敗のために，御前で叱責にさらされた。（陛下は）ジャーミウの向かいにある，サラーイ・ムルク・ハーニーム（ティームールの正妃。前掲間野論文「ティムールのオルド」348-9頁参照）のマドラサに下馬され，正義と公正の建物を強化するために，任務を帯びた役人やビティクチ（13世紀のモンゴル支配時代から用いられる，ウイグル語起源の「書記」を意味する語）らを捕縛し，審問の場に連行した。審問の後，被害が他に及んだ者については，相応の仕置きと懲罰がなされた。中でも，書記たちの中の大物であり，勝利をしるしとする軍旗（ここでは，ティームールのことを象徴的に表現している。）が不在の間に，ヴァズィールの職務を担っていた，マフムード・ダーヴドとムハンマド・ジャルドは，二人とも，カーニ・ギル（サマルカンド郊外の牧地・幕営地，ティームールによって各種の祝宴などが開かれた。間野英二『バーブル・ナーマの研究Ⅲ　訳注』1998，松香堂，90頁参照）に連行され，これから説明されるであろう祝宴の間に絞首刑にされた。

（テヘラーン刊本第2巻 s. 421，ウルンバーエフ刊行タシケント写本 457 b-458 a）

この記事は，有名なもので，ティームールは自らの不在中に工事が進められた，マスジド・ジャーミウの出来に満足せず，特に，その正門は取り壊しを命じられるほどであった。このあたりの状況については，ティームールの宮廷を訪れ，サマルカンドには，1404年9月8日から11月20日まで逗留した，当時のカスティーリャ王国の使節である，**ルイ・ゴンサーレス・デ・クラビーホの旅行記**の中に，次のような記事がある。

Timour Begが彼の妻Khanoumの母の記憶を尊重するために（この記事は，本来「アミール・ティームールのマスジド・ジャーミウ」と称されるべき，サマルカンドのマスジド・ジャーミウが現在，何故，「ビービー・ハヌム」と通称されるのか，について推測の材料を与えてくれるように，思われる。）建設させた，モスクはサマルカンドのすべてのモスクのうちで，最も名高いものである。その竣工後，彼は，彼の好みによれば，あまりにも小さすぎると考えた正門を破壊するように，命じた。基礎を置くために，その前には二つの穴が掘られた。仕事を急がせるために，彼は自ら門の半分の建設を監督することを宣言し，彼の二人の顧問に，あとの半分を作ることを委託し，誰が，最初に仕事を終えるか，人々がよく見るように，布告した。Timour Begはその時，弱っていて，歩くことも騎乗することもままならなかった。彼は輦台に担がれて移動し，毎日仕事場にやってきては，日中の一部をそこで過ごし，職人たちを働かせた。その上，彼は，穴の中で働く者たちに，まるで犬に向かって投げるように，投げ与えるよう，沢山の料理された肉を持ってこさせた。Timour Beg自ら職人たちに肉を投げ与えた。工事は，呆気に取られるほど急速に進んだ。Timour Begは時折，基礎を置くために雇われている男たちに，金銭を投げ与えた。人々は昼も夜も，その建設に働いたが，大商業路の建設と同じく，早く訪れた雪のために，止めなければならなかった。(*La route de Samarkand au temps de Tamerlan, Relation du voyage de l'ambassade de Castille à la cour de Timour Beg par Ruy González de Clavijo 1403–1406*, traduite et commentée par Lucien Kehren, Paris, 1990. p. 251)

ヤズディー及びクラビーホの記事により，サマルカンドのマスジド・ジャーミウは，一度出来上がっていたものの，その正門がティームール自身の命令

で取り壊され，今回もティームール自身が工事に立ち会うという，熱心さで再建工事が進められていったようである。正門再建工事の顚末は明らかではないが，ティームール自身がヒターイ遠征（明朝討伐）へと出発し，807年ジュマーダーⅠ月23日（1404.11.29.）にはオトラールに到着，ここで越冬する間の，同年シャアバーン月17日（1405.2.18.）に病没したために，在世中には完成しなかったようである。

19世紀の前半に書かれた（テクストの校訂者である，イランの碩学 イーラジ・アフシャール博士によれば，正確な執筆年代は確定できないが，著者がこの著作の中で「1251年ジュマーダーⅠ月16日（1835.9.9.）に，（シャーヒ・ズィンダ墓廟群にある）قثم بن عباس の墓碑銘を書写した」と記していることから，このころに執筆されていたのではないか，と推定している。s. 16.），**サマルカンドに関する地誌で，سمريه と題された書物**によれば，アミール・ティームール・クーラカーンのマスジド・ジャーミウのドームの玄関の上方には，

امر[ببناء] هذه الجامع السلطان الاعظم امير تيمور كوركان بن امير ترغاى در تاريخ احدى وثمانمائة

と書かれてあり，また，ジャーミウの門の上方には，

وفق في اتمام هذه الجامع في سنة ست وثمانمائة

と書かれてあったという。

قنديه و سمريه. دو رساله در تاريخ مزارات و جغرافياى سمرقند. بكوشش ايرج افشار. تهران. 1364 **شمسى.** s. 155. この記事によれば，سمريه の著者である，ابو طاهر خواجه سمرقندى は，ジャーミウの玄関の上方で「**最高のスルターン，アミール・タラガーイの子，アミール・ティームール・クーラカーンが801年にこのジャーミウの建築を命じた。**」という内容の文章（碑文？）を見ており，ティームールのことを「最高のスルターン」と呼ぶなど，内容に相違があるものの，この文章（碑文？）が本稿で取り上げた定礎碑文と同一のものである可能性がある。また，正門に掲げられていたという碑文の一部は，これもまた後世に作られた複製かもしれないが，筆者がサマルカンドを訪れた，2002年8月終わり現在，マスジド本体の北側にある空き地に放置されていた。（写真3）

写真 3

3．定礎碑文の内容に関する問題点

実は，上記の碑文の内容に関してひとつ問題がある。日本語訳に示したように，この碑文には，ジャーミウの創建が命じられた，ヒジュラ暦 801（西暦 1398－99）年という正確な年記と，ジャーミウの創建を命じた，アミール・ティームール・クーラカーン（キュレゲン）の名および彼の父祖の系譜が「**アミール・カラチャール・ノヤン－イーラーンギール－イージェル－ブョルギュル－アミール・タラガーイ**」として，5代にわたって記録されている。アミール・ティームールの系譜については，筆者の恩師である，間野英二博士（京都大学名誉教授）のすぐれた論文「アミール・ティムール・キュレゲン ―― ティムール家の系譜とティムールの立場 ――」（初出は『東洋史研究』34－4，1976年，その後『バーブル・ナーマの研究Ⅳ，バーブルとその時代』松香堂，2001年，317－36頁に収録）の中で詳しく論じられている。それによれば，サマルカンドのティームール家の墓廟グーリ・アミール内部にある

ティームール自身の石棺（残念ながら，筆者は見ていない）に刻まれたティームールの系譜は「**カラチャル・ノヤンの子，アミール・イジェルの子，アミール・イランギールの子，アミール・ボルギュルの子，アミール・タラガイの子**」（上掲書318頁）となっており，イジェルとイランギールの順がビービー・ハヌムの碑文とは逆になっている。

筆者が今回の調査中，サマルカンドで実見した，グーリ・アミール廟内部のムハンマド・スルターン（ティームールの長男ジャハーンギールの息子で，ティームールが後継者として大きな期待をかけていたが，7年戦役の帰途，29歳の若さで早世した。上で引用した，ヤズディーの記事の中に「ジェテとの境界に駐屯していた」王子として登場している。死去の日付は，ヤズディーの『勝利の書』によれば，805年シャアバーン月18日（1403. 3. 13.）である。op. cit., s. 351. この日付の4日前には，アンカラでティームールの軍隊に敗れた，オスマーン朝のスルターン，ユルドゥルム・バーヤズィードが，アナトリアのアクシェヒルで病没している）の石棺（写真4）に刻まれた，ティームール家の系譜の初めの部分は次のような内容であった。

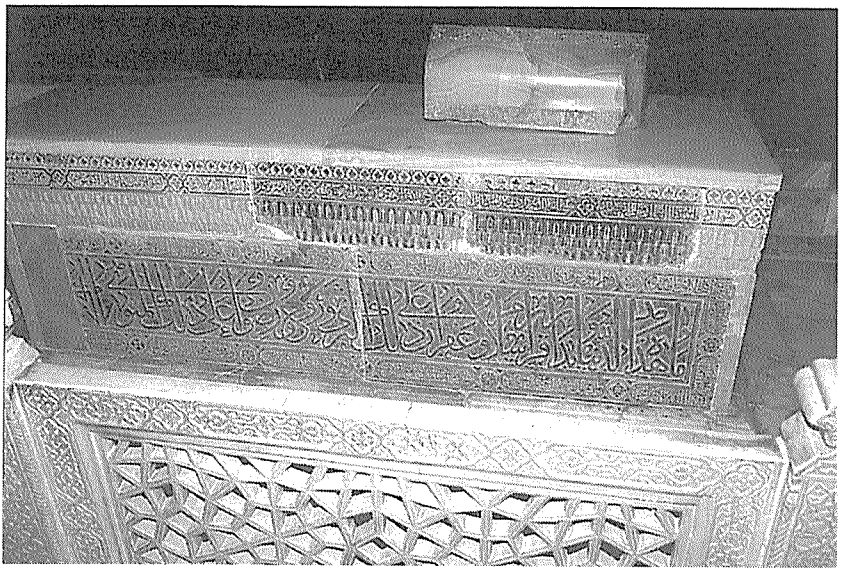

写真4

هذا مرقد السلطان العالي ولي العهد في الزمان اميرزاده محمد سلطان بن الامير جهانكير بن الامير تيمور كوركان
بن الامير ترغاى بن الامير بركل بن الامير ايلانكير بن الامير ايجل بن الامير قرجار نويان .....

日本語に訳すと，

これは，……アミール・カラチャール・ノヤンの子，アミール・イージェルの子，アミール・イーラーンギールの子，アミール・ブョルギュルの子，アミール・タラガーイの子，アミール・ティームール・クーラカーンの子，アミール・ジャハーンギールの子，いと高きスルターン，時の皇太子，アミールザーダ・ムハンマド・スルターンの永眠する場である。

となり，系譜の順序は，「アミール・カラチャール－アミール・イージェル－アミール・イーラーンギール－アミール・ブョルギュル－アミール・タラガーイ」となっていて，前掲のものと同一である。ただ，グーリ・アミール内に安置された，ムハンマド・スルターンの石棺に刻まれた，ティームールの系譜は，通称ビービー・ハヌム・マスジドの定礎碑文とは「イージェル－イーラーンギール」の順序が逆になっているが，アミールという称号を除いた各個人の名前のアラビア文字綴りが完全に一致していることは，留意してよいと思われる。

さらに，2003年9月24日実物を確認できた，現在カザフスタン共和国のトゥルキスタン市にある，ティームールが再建させた，トゥルク系の諸民族の間で有名な，イスラームの聖者，フワージャ・アフマド・ヤサヴィー廟の内部（写真撮影は不可）に掲げられた石膏板上の刻文（井上靖・樋口隆康・NHK取材班『シルクロード，ローマへの道，第9巻，大草原をゆく－ソビエト（1）』日本放送出版協会，昭和58年，110頁の上方に，天地逆の状態だが，写真が載せられている。）は次のように読める。

امر بعمارة هذه الروضة الشريفة الامير الاعظم مالك رقاب الامم المختص بعناية الملك الرحمن امير تيمور
كوركان بن امير ترغاى بن امير بركل بن امير ايلنكر ين امير ايجيل بن امير قرجار خلد الله تعالى سلطانه وملكه

日本語に訳すと，

アミール・カラチャールの子，アミール・イージールの子，アミール・イーランギルの子，アミール・ブョルギュルの子，アミール・タラガーイの子，最大のアミールにして慈悲深い王（神）の摂理を独占する，諸民族の奴隷たちを所有する，アミール・ティームール・クーラカーン ―― 至高なる神が彼の権力と王権を永遠ならしめるように ―― がこの高貴なる霊園の建設を命じた。

となり，ここでもティームールの系譜は，「**アミール・カラチャール－アミール・イージール－アミール・イーランギル－アミール・ブョルギュル－アミール・タラガーイ**」となっている。これらの例を考慮に入れるならば，ビービー・ハヌム・マスジドに掲げられた碑文のティームールの系譜に関わる部分の中で「**イーラーンギール－イージェル**」の順は，ここに挙げた他の3例とは逆になっており，碑文が後世に作られた複製品であるならば，何故このような逆転が起こったのかが説明される必要があろう。上記2名の祖先の名前の逆転が，もしマスジドの創建当初から碑文に現れていたとすれば，しかもそれが，碑文製作者の単なる杜撰な過誤によるものではないとすれば，ティームールの系譜自体が当時一部未確定であったことを示すものかもしれない。いずれにせよ，ここで取り上げたビービー・ハヌム・マスジドの碑文の歴史資料としての価値は，今後の更なる調査・検討によって明らかにされるべきものと思う。

（本稿は，平成14－15年度・科学研究費補助金・基盤研究（A）（1）《研究課題名：「中央アジアにおけるムスリム・コミュニティーの成立と変容に関する歴史学的研究」，研究代表者：堀川徹・京都外国語大学教授》による研究成果の一部である。）